会がありました。その時はご病気であることを知りませんでしたが。しかし、私の中でもっとも鮮明に思い出されるのは、2004 年に京都で開催された、彼の退官のときの最終講義とその後の祝賀会でした。幸いにも私は、海外から招待されたチンパンジー学者たちの一人でした。私たちはすばらしい歓迎を受けました。圧巻は何と言っても、なんとも多くの大学の学徒・同僚らが、西田博士に対して尊敬の念を向けていることでした。

私たちはこの学問分野の中でもっとも偉大な霊長類学者の一人を失いました。日本と西洋双方の次世代の動物行動学者たちに彼が果たした多大な貢献、そして彼が残した遺産に、私たちは感謝せずにはいられません。

（翻訳：坂巻 哲也）

西田さんの背中

五百部 裕
椙山女学園大学

今、9 年ぶりにマハレに来ている。私が最初にマハレに来たのは 1995 年。その時、西田さんと数か月をともにした。私は幸運なことに、3 人の優れたフィールドワーカーと調査をともにすることができた。学部学生時代には、トカラ列島の口之島で野生化ウシの調査を行い、伊谷さんの背中を見て歩くことができた。大学院生時代には、旧ザイール共和国のワンバで、ピグミーチンパンジーを追って加納さんと一緒に森を歩いた。そして、マハレでは西田さんと過ごした。3 人はそれぞれ違ったやり方でフィールドワークを行っていた。伊谷さんは調査中に俳句を作り、それを私に披露してくれた。加納さんは黙々と森を歩き、私はただ黙って彼の後姿を見ながら歩いていた。そして西田さんは、チンパンジーの食べ物を味見しては、それを記録していた。伊谷さんと加納さんがジェネラリストだったのに対して、西田さんはスペシャリストだったように思う。西田さんの関心は常にチンパンジーに向いていた。彼は、チンパンジーの目を通して彼らの住む環境を理解しようとしていたのではないだろうか。しかし、3 人に共通する点もある。それは彼らがフィールドではあまり語らず、私は彼らのあとをただ歩くだけでフィールド調査のなんたるかを学ばなければならなかったことだ。彼らの後姿を見ながら歩き、彼らのやり方を見て、フィールドで必要なことを感じていた。西田さんの後姿を追いかけることができたからこそ、マハレにおいて重要なことを理解することができたのだ。また一人、こうしたフィールドワーカーがいなくなってしまった。これは当然のことながら日本の霊長類学にとって大きな損失だ。もし可能なら今一度西田さんの後姿を見ながら、マハレを歩きたかった。まだまだ西田さんから学ばなければならないことはたくさんあるのだから。しかしそれも叶わぬ夢となってしまった。たぶん西田さんに対する供養として私ができることは、こうしたフィールドワーカーに私が一歩でも近づくことだろう。とても西田さんの域に達することはできないだろうが。

追悼文

中村 美穂
アニカプロダクション／京都大学野生動物研究センター

初めてお目にかかったのは大学 3 年の霊長類学の講義。早口についていくのが大変でした。志賀高原のニホンザル実習でフィールドワークの楽しさを教えていただきました。マハレでチンパンジーを探して道なき山を登った時、群れには会えませんでしたが先生は満足そうでした。初めての場所、新しい科学的知見、今までにない考え。いつも目を輝かせる永遠の青年でした。

ンクングウェの威容に見送られて

保坂 和彦
鎌倉女子大学

早いもので、大学院に進学した 1991 年の 8 月、西田さんに連れられて、マハレ山塊を訪れてから 20 年もの歳月が経過しました。

私のチンパンジー調査人生は、西田さんに金魚の糞のようについて歩いた 10 日間に始まりました。一人で個体追跡するようになってからも、追跡対象のオトナ雄同士が一緒に歩くことが多いため、結局、彼の背後に付き従うはめになりました。当時、私には親子ほど離れた彼に遠慮があり、緊張していました。おまけにあの早口に合わせて喋ろうにも舌の回転が追いつかず、苦労しました。